
ねえ、あのね

和屋万幸

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ねえ、あのね

【Nコード】

N9949Y

【作者名】

和屋万幸

【あらすじ】

初投稿です。さらっと書いたので内容もつつすいです。

「ねえ、あのね」

私と彼はお付き合いしている。世間一般的に言えば恋人同士。彼は大学2年、私は短大2年。でも年は彼のほうが1つ上。そんな感じは全くしないけれど。

「私たち、別れたほうがいいのかな？」

彼の家から一番近いファミレスで向かい合わせに座り話し出す。彼はメニューから顔をあげ怪訝そうな顔で私を視線を移した。

「なんで？」

「だって、課題たくさんあるんでしょ？バイトもあるし私に構ってる暇なんて無いじゃない」

「なに、別れたいの？」

「……邪魔になってるんじゃないかって、思ってる。」

「俺は邪魔なんて思ってるじゃないけど」

「それに最初に言ってたじゃない、『短大生と付き合うつもりはない』って。『すぐ卒業しちゃうから』って」

「それは……言ったけど」

彼は少し気まずそうに下を向く。

「私は卒業します。貴方はあと2年も残ってる。院にいったらそれ以上だよ？たかさんの人に出会って、私なんかよりずっと素敵な人だって出会うよ」

その不安も少しあった。私としては彼は普通のどこにでもいるような人だと思っていたが、写メを見せた友人は皆彼をカッコいいと言う。所謂イケメンらしい。自分で言うのもなんだが、確かに他の友人の彼女たちよりはカッコいい・・と思う。

それに対して私は可愛くもなんともない、下膨れで団子鼻、目も小さい。化粧つ気もなく『イモ女』と母に言われるほどだ。ほんと、なんで彼が私の彼女なのか今でも謎だ。

「また一人で不安になってるんだ」

彼は比較的大きな目で私を見つめる。（実は足も彼の方が細い。彼のジーンズを履けたためしがない）よく見ればまつ毛も長い。よく見れば劣等感しかわかない顔ではないか。（でも、そんな劣等感でさえ彼は笑いながら受け止めてくれる）

「またっていうな」

「ごめんごめん。でもこの話何回目かなー？」

「うるさい！！私はいつでも本気なんだから！」

「知ってる。じゃあ別れてどうするの？俺さみしいなーただでさえ一人暮らしはさみしいのに・・」

「じゃあ、このままでいいの？」

「うーん、本気で追い込まれた時はメールも止めるかもだけどさーお前はわかってくれるじゃん。大変だった」

「まあ。私がしなくていいって言ったからね」

「それにさ・・」

結婚しなくていいの？」

思い起せば彼に告白したのは私。酒も入っていて酔っていた。なのに彼は告白を受け入れてくれた。今思い出しても恥ずかしい私の

『結婚してください。つーか結婚を前提にお付き合いしてください』
という告白を。

「……ずるくない？」

「そう？つーか俺だって不安だらけだし。俺いいトコ一つもないし、ダメ人間だし。お前が俺のどこ好きになったのか今でも謎だし」

あ、同じこと考えてる

「でも、別れてもきつと俺のダメ人間具合は変わらねーよ？なら別れても意味ないし、俺お前のこと好きだし」

「別れた方がいいと思うけど、私だって貴方の事好きだから別れたくない」

「ならいいんじゃない？別れなくて」

「……うん、ごめんね」

「謝らなつて。不安になつたらいつでも言っつていいから。その方が俺も助かる」

「ありがとう」

「どういたしまして」

私たちはこれまで何回も似たような話をしてきた。面と向き合つてはもちろん、メールでも。(メールは普段からお互いに絵文字等

使わない派なので感情がとて読みにくい）私は彼のことが好きだから不安になる。それは彼も同じ。彼はたまに弱音を吐く時がある。いつもとは立場が逆になって私が彼を受け止めてあげるのだ。

きつとこれからも繰り返し続けるのだろうけれど、それはそれで私たちの愛情確認ということにしておこう。それでいつも最終的には

「ま、お互いにダメ人間ってことなんだろうけど」

私が彼が締めくくる。

「で、何食べる？」

「んーじゃあ……」

私が卒業しても、こんな言い合いできるのかな？

でも今は今を楽しむことにする。

いつだったか彼が『別れるときは別れるんだから』って言ってた。

なら私はそのときが来るまで待つことにしようと思う。

だからとりあえずメニューを見ながら彼に

「ねえ、あのね」

（なんで結婚かって？だって彼、部屋きれいだし。夜中でも気にな
つたらシンクの掃除始めるんだよ。ちゃんと料理するし、洗濯もす
るし。結婚したら円満な家庭が築けそうじゃない！）
（もちろんこの事は彼も知ってるんだから！）

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9949y/>

ねえ、あのね

2011年11月30日00時51分発行